船員の生活をサポートする情報誌

船員ほけん

2017 3/4 月号 Vol.692

平成29年3月1日発行（隔月1回1日発行）

特　集　貴重な若年船員を育てるために 国立口之津海上技術学校 …… 2

船員保険　全国健康保険協会 船員保険部からの大切なお知らせ …… 6

ル　ポ　オープンから間もなく2年 品川シーズンテラス健診クリニック …… 16

●潮風通信 …… 10
●第27回　灯台物語 …… 11
●第３回　新ぐるり海道歴史散歩 …… 12
●健康広場 …… 14
●巡回健診スケジュール　ほか …… 19

〈表紙写真紹介〉　国立口之津海上技術学校　練習船「口洋丸」

発行/一般財団法人　船員保険会

特集

貴重な若年船員を育てるために

国立口之津海上技術学校（長崎県南島原市口之津町）

口之津町は島原半島の南端にあり、古くから良港として、また船員が多い町として栄えました。この歴史ある町で、明日の船員を養成されている「国立口之津海上技術学校」をご紹介します。

海上技術学校とは

海上技術学校は内航船舶職員（航海士や機関士、船長や機関長）を養成することを目的とし、独立行政法人海技教育機構が船舶職員養成施設（四級海技士（航海、機関））として設置する中卒３年課程の学校である。（海上技術学校は、国土交通省の所管のため、文部科学省が所管する学校教育法上の名称である「高等学校」の名称は使用していない。）

授業内容

国語・数学・理科・社会・英語など高等学校と同様の普通科目のほか、四級海技士水準の専門科目（航海・運用・海洋気象・船用機関・電気電子工学・情報技術など）がある。

専門科目の授業は、教室での座学だけでなく、校内練習船口洋丸等や実習装置を使った実技が組み込まれており、また３年生の３学期には独立行政法人海技教育機構航海訓練部所属の大型練習船による、３ヶ月の実習訓練が行われる。

四級海技士とは

「四級海技士（航海）」は5,000トン未満の沿海区域を航行する船舶の船長の資格であり、「四級海技士（機関）」は出力6,000キロワット（約8,000馬力）未満の沿海区域を航行する船舶の機関長の資格である。この資格を得るためには、筆記試験と口述試験及び身体検査に合格する必要があり、海上技術学校を卒業すれば、四級海技士（航海、機関）の筆記試験が免除される。

在校生

現在の在校生は１年生32名、２年生33名、３年生32名の計97名で、出身地はほぼ九州内であり、このうち長崎県が約45％、熊本県が40％を占めている。

寮生活について

在校生の約９割が寮生活で、校内に男子寮と女子寮があり、各室３～４名の部屋割で、日課に従い規則正しく生活している。また娯楽時間は、テレビやゲーム、グラウンドや体育館での運動など伸び伸びと過ごし、週末や連休には帰省することもできる。

寮

部活動について

全生徒がいずれかの部または同好会に所属している。

サッカー部・ソフトテニス部・バスケットボール部・バドミントン部は全国高等学校体育連盟に加盟し県内の大会に出場している。また、いかにも海上技術学校というカッター部は、近年好成績をあげている。

卒業後の進路

卒業後の就職先としては、国内航路に就航する貨物船・タンカー・旅客船・カーフェリー・タグボートを航行する船会社などが主で、ほかに水産庁や県の調査船などの官庁船に乗り込む場合もある。

現在海運会社からの求人が増大している。

サッカー部

ソフトテニス部

バスケットボール部

カッター部

バドミントン部

生徒の皆さんは口之津のこの上ない環境の中で明日の海運業界を担うため日々勉学、技術の習得に励んでいました。

次ページに同校の中嶋 眞校長先生に口之津と同校の歴史及び最近の生徒の特徴についてまとめていただきましたのでご紹介します。

特集

今、海の仕事が熱い

国立口之津海上技術学校
校長　中嶋　眞

大手船会社は都市部に集中していますが、船員さんが多い街、船主さんが多い街、港として栄えた街は各地に点在します。それぞれの街に「あー、そうだったのか。」と誰もが納得できる歴史がありそうです。

口之津も船員さんが多かった町、特に賄いさん（司厨長、司厨員）が多かったことは有名です。過去に「何で、口之津は船員さんが多いの？」と質問を受け、明確に答えることがでず、恥ずかしい思いをしたことがありました。

ここでは、「口之津町史・郷土の歩み」や「海員学校50年の歩み」等の資料を参考にして、町と学校の歴史を、そして過去に比べたら大きく変化しつつある本校の様子を紹介し、最後に、将来生徒達がお世話になるであろう方々へのお願いを記させていただきます。

1．「船員の町・口之津」の歴史と「国立口之津海員学校」の誕生

口之津の港としての歴史は、1562年（永禄５年）時の戦国大名 有馬義直（義貞）が、天然の良港である口之津湾を利用して開港したことに始まります。1567年、ポルトガル船３隻が入港したのを皮切りに、海外からの物資に加えて西洋文化やキリスト教もこの地に伝えられました。1612年に禁教令が発せられ、それに端を発するキリスト教徒弾圧に抗して、1637年「島原・天草の乱」が勃発、地域住民の殆どが殉教するという悲しい歴史が残されています。

明治11年に大牟田・三池石炭の海外輸出港に指定されてから、口之津は石炭の中継（積み換え）港として栄えた後、明治41年に三池築港の完成により斜陽化、大正11年に三井物産口之津出張所が廃止されたことをもって中継港としての役割を終えました。

三井船舶の前身である三井物産船舶課が口之津に置かれたことから、明治期において口之津の船員数は徐々に増え、大正10年には500名近く、その後も船員を目指す若者の数は衰えず、「船員の町」として栄えました。

終戦後も町内の多くの若者が船員を夢み、遠く唐津海員養成所（昭和27年に海員学校となる）を目指したものの、定員には限りがあり門戸は広くなかったようです。

それ故、町内に海員養成所誘致の機運が高まり、昭和27年６月に口之津町長他３ヵ町村長の名で「海員養成所設置に関する陳情書」が提出され、翌年７月の特別国会において「海員学校新設に関する予算案」が可決成立、昭和29年４月に「国立口之津海員学校」が誕生しております。

2．国立口之津海員学校開校から現在まで

本校は地元の方々の大きな期待の元、昭和29年に開校してから60年余りの歴史を重ねて参りました。この間3,100名ほどの卒業生を輩出し、海運界の要請に応じて執られた教育課程の改変、その変遷は以下の通りとなっております。

① S･29.4～S･44.3　本科・航海科（甲板科）、機関科【１年課程】１～15期生
② S･42.1～S･46.3　補導科･司厨科【３ヶ月課程・年３回の入学】１～13期生
③ S･44.1～S･62.3　高等科･甲板科、機関科【２年課程】１～17期生

（乙二航海、乙二機関養成施設）
④ S･46.4～S･61.3　本科･司厨科【１年課程】（調理師養成施設）　１～15期生
⑤ S･61.4～　本科【3年課程・高卒資格、両用教育】１～32（1年）期生（四級（航海）、内燃機四級（機関）養成施設）

海運界の景況・盛衰に沿って課程の改変が行われ、当初の外航甲板部員、機関部員、司厨員の養成（補導科・司厨科、本科司厨科の卒業生の合計は900名を越えます。）から、内航船舶職員の養成へと大きく舵を切り、現在の本科（中卒３年課程）が設置されて30年余りが過ぎました。この間学校として様々に大変な時期もありましたが、内航船員の高齢化、船員不足が顕在化したことにより、数年前からこれまでに経験したことのない数の求人をいただいております。

出口が良ければ入り口に集まるのが道理で、過疎

化・少子化が進む中にあっても、適正な数の出願を確保することができております。

3．口之津校の募集活動と現状、最近の生徒の特徴

表題に掲げた、「今、海の仕事が熱い!!」は、本校の募集活動で「キャッチフレーズ」として使っている言葉です。求人が劇的に増えていることを始めとし、やり甲斐のある仕事、魅力ある仕事であることを伝えたいという思いが込められています。

また、募集要項の挨拶の欄では、『将来を見据え、真剣に進路選択に取り組む“海好き、船好き、機械好き”な中学生へのメッセージ』と冒頭に記し、一般の高校とは違い、明確な目標を設定し、将来大海原を舞台に活躍したいと望む生徒にとって、魅力ある学びの場であることを案内しております。

近年募集活動において感じることは、船員家庭の子供、地方で海運業を営んでいる家庭の子供の比率が高まっていることです。記録として残す数値ではないため、あくまでも感じるとの表現になりますが、入学試験の面接において、「父の背中を見て・・・。」とか、「父のように・・・。」という言葉で、船員の道を選んだ理由を誇らしげに述べる受験生が増えているのは確かです。子供が父親の背中を見て同じ仕事に就きたいと言ってくれるなんて、職業人としても、親としても誇らしく嬉しいことだと思います。

出口が良くなったことにより入り口も良く、正のスパイラルを描き始めた結果として、校内・寮内とも安定した状態にあります。将来の仕事を見据え、それぞれに大きな夢を描いて入学した生徒達、モチベーションは高いはずです。入学した当初は慣れない団体生活に戸惑い、苦労しながらも互いに助け合い、励まし合いながら馴染んでいき、周囲に対する気遣いや心配りも覚えながら成長する様は目を見張る程です。

少し前の話しですが、校内で整備作業を行った際、準備から片付けまでの段取り、整備作業に必要なチョットしたコツを身につけ、更には次にやって欲しいことの準備までもやってくれた生徒がいました。後でその生徒に「どこで習った？」と聞いたら、漁師である父親の仕事を普段から手伝っていたとの回答でした。その生徒は、家業を手伝う中で職業人に求められる様々なことを身につけていた訳です。しかし、今時こんな生徒は希です。

最近の家庭では、子供が手伝う仕事は減り、風呂掃除等の簡単な手伝いはやらせるにしても、段取りを考え、工夫しながら行うような仕事は殆どありません。新人船員について、「最近の新人は・・・。」というお叱りの言葉をよく耳にしますが、過去の卒業生に比べ現在の生徒達に足りないのは、本人のやる気や努力ではなく、それまでの生活の中で得た様々な経験ではないかと分析している次第です。

過去の学校・クラスには、活動的で野性味溢れる「猛者」や「強者」と呼んでもおかしくない生徒が数々いました。しかし、今は皆無です。

「ゆとり世代」は既に実社会で活躍しています。最近の卒業生や在校生の年代は、その次の「さとり世代」とも呼ばれ、多くを欲しない、人にも自分にも優しい、ガムシャラという言葉が似合わない等の特徴があるとされています。当然個人差はあるものの、生徒達に当てはめてみると、うまく表現した言葉だと感じ入ることもしばしばです。

生徒達が学校で過ごす期間は２年９ヶ月、できる限り鍛え、できる限り仕上げて送り出したいと職員一丸となって取り組んでいます。また、生徒達もそれに応えてよく頑張っていますが、現場から求められる域まで辿り着くのは中々難しいのが現実です。

それ故、様々な会議や会合で『貴重な若年船員をより多く育てるために、少しばかり長い目で・・・』とお願いすることが増えて参りました。

事務系、技術系、医療・介護、情報、接客、公務員等々、将来の様々な進路選択肢の中から「船」を選んでくれた貴重な若者達です。『入学した者のより多くが卒業し、就職した者のより多くに所期の夢を叶えてもらいたい。』、30年近く生徒達と接し、彼らの頑張りを見てきた教員の願いです。現場で指導される方々には、様々にお手数をおかけすることも予想されますが、よろしくお願いいたします。